

教育長様

校番 004 広 高等学校長

## 「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校 令和元年度 報告書

### 1 研究の概要

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

- (1) 「探究的な学び」を基底にした主体的・協働的な活動を通じてコンピテンシーを育む学習方法の開発
- (2) 「生徒の学びに向かう力、人間性等」を促進する評価の在り方の工夫・改善についての研究

研究内容（※対象，時期，方法を含む）

○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

#### (1) 「総合的な探究（学習）の時間」を軸としたカリキュラム・マネジメントに関する研究

「総合的な探究（学習）の時間」を軸として全ての広範な教育活動において探究的な学びを推進，充実させていくためには，全教職員の主体的な参画意識が求められる。その結果として，生徒一人一人の資質・能力（コンピテンシー）や知・徳・体をバランスよく育てていくことになる。全職員の参画意識を高める一つの方法として，本校の校訓・校是，「目指すべき生徒像」の実現に向け，「総合的な探究（学習）の時間」を軸として全ての教育活動を構造化し，可視化するコンピテンシーベースのカリキュラムマップである「学びのランドデザイン」を策定した。

策定に当たっては，①生徒一人一人が，本校で実施する教育活動のそれぞれが，育成を目指す7つの資質・能力（コンピテンシー）のいずれに該当するかを明確化させること，②3年後を見通して，どの時期に，いずれの教育活動でいかに資質・能力（コンピテンシー）を育み，自己の生き方・在り方を確立させ，行動すること，を主眼においた。各教科・分掌が，それぞれの教育活動をコンピテンシーベースの教育目標として再定義し，どのような資質・能力を育てていくか明確化させ，カリキュラムマップとして構造化した。

#### (2) 「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発

今年度より先行実施された「総合的な探究の時間」において，「生徒が立てた“問い”に対して，それを検証し，新しい“問い”を生み出すこと」，「『探究的な学び』のいずれの過程においても，仮説を立て検証するプロセス，またその振り返りを重視すること」を念頭においたカリキュラム開発を進めた。

指導計画については，管理職を含め校内の各分掌，学年，教科を横断する8名で構成される「課題発見・解決学習推進プロジェクト」で，全ての学年の「総合的な探究（学習）の時間」の指導案を検討し，更にその内容を各学年会及び授業担当者会議で審議・検討し，当該授業を実施した。また，授業後には，当該授業についての振り返りを丁寧に行い，その内容を踏まえて，次時の指導案の展開を作成，審議・検討するというサイクルを徹底した。

また，探究活動のカリキュラム開発に当たっての視点として，①「探究的な学び」をより“真正”なものへと近付けるために，生徒の“本気度”や“期待感”を高めるしかけを創り出すこと，②成果物を完成させることを目的とするのではなく，その過程を重視すること，③学校内外の関係者である第三者からの評価を適宜受けること，を念頭に置いた。

更に，生徒の課題設定やアウトプットに関しては，生徒に対する授業担当者のファシリテートを基本とした探究活動の過程において，それぞれの生徒の状況を見極め，積極的に生徒に対して，「なぜ？」「どうする？」「その根拠は？」などと問いかけ，対話を重ねることで，更なる探究活動の在り方を模索させ，自己決定を促すことを重視する指導の工夫を行った。

#### 【第1学年「総合的な探究の時間」に係るカリキュラム開発の概要】

- ①生徒の主体性を育む探究を核においた「総合的な探究（学習）の時間」に関する先行事例研究（通年）
- ②学習オリエンテーションにおける“問い”立てに関するカリキュラム開発（4月）

「総合的な探究の時間」の年度最初の時間では，生徒に「自分の目で見た校舎の周りの風景を絵と英語（文章）で描写」させる活動を通じて，生徒一人一人が，常に“問い”を立て，その答えを探究し続けることの必要性について学ばせた。このことを通じて，「探究的な学び」の姿勢を持ち続け，実践することが，高等学校における学びの軸であることを自覚させた。

- ③「ミニ社会探究～探究クラスマッチ～」の実施（7月～11月）

生徒が社会のリーダーとして社会を牽引しているであろう 2050 年をイメージし、呉市が持続可能な社会として、どのように進むべきかを考察し、提言することを自己表現させるミニ社会探究に取り組みさせた。これは、第 2 学年で実施する課題研究の前段階と位置付け、探究の過程を、型として教え込むのではなく、教師の生徒に対するファシリテート、生徒同士の協働的な学び等を通じて主体的に身に付けさせること、また、その振り返りを充実させ、更なる探究的な学習活動に向かわせることをポイントとした。その方法は次のとおりである。

ア 生徒は、提示されたテーマに従って、各グループ（5 人 1 グループ）で、社会探究を組み込んだ課題研究（情報収集〔取材、フィールドワーク等〕⇒整理・分析⇒まとめ・表現）を実施する。

イ 課題研究の過程においては、学校外に出て、実社会（地域社会、行政、産業界（企業）、大学等）との接続を通じて、課題の解決の方策について、より真正なものへ近付くことを企図する。

ウ 課題研究により検証し、導き出された解決の方策を自己表現するに当たっては、「どのような方法」「より適切、効果的な方法」を生徒自身が探究する。

エ 生徒の“本気度”を高めるしかけの方法として、クラスマッチ形式をとり、「探究クラスマッチ」と題した発表会を実施する。

#### ④「ミニ社会探究～探究クラスマッチ～」から「社会探究」へ（12 月～3 月）

「ミニ社会探究～探究クラスマッチ～」の振り返りにより、その探究の過程でできたこと、できなかったことについて整理し、自らを向き合わせ、そこで習得したことを基に、今後は、自己の在り方・生き方と一体的で不可分な課題に対して、社会探究活動を組み込んだ課題研究である単元「社会探究」へ進むことになる。12 月～3 月は、「課題の設定」及び「情報の収集」の繰り返しをその学習活動とした。生徒一人一人が興味・関心をもつことのできるスクラップノートを制作させ、その制作内容について他者との対話を通じて気づきを獲得することにより、探究課題の発見・設定につながるような学びをスパイラルに展開した。また、地域社会や大学等、地域の人材を効果的に活用し、生徒一人一人の社会探究活動に向けた意識を喚起するカリキュラム開発を行った。

#### ○資質・能力の評価について

##### (1)「生徒の学びに向かう力、人間性等」を促進する評価の在り方の工夫・改善についての研究

資質・能力の評価については、あらゆる教育場面において、様々な評価方法によって、生徒一人一人が自己の資質・能力の変容に気づき、自己肯定感を高め、更なる「学びに向かう力、人間性等」を促進させることがその目的であると考え、次の研究を進めた。

資質・能力の設定やルーブリックの作成及び共有については、昨年度、学校全体で育成する資質・能力を 16 から 7 つに整理するとともに、そのルーブリックの達成度の指標についての見直しを行い、改訂した。これらの過程においては、全教職員によるワークショップ型のカリキュラムマップに関する校内研修の実施等により、全教職員に参画意識をもたせるなどして共有化を図ってきた。

この学校全体で育成する資質・能力のルーブリックを基にして、平常の学習活動においては、単元ごと及び 1 時間の学習活動に呼応したルーブリックを作成し、それぞれの振り返りにおいて、生徒一人一人が自己評価を行った。また、学校全体で育成する資質・能力のルーブリックは、形成的評価を中心に学習評価の改善を図ってきた。これらの自己評価では、数値評価とともに、生徒個々がそれまでの具体的な学習活動や場面を挙げ、文章評価による振り返りを重点的に行わせた。そして、その記述内容について、個別面談や日常の対話を通じて生徒にフィードバックを組織的に行い、生徒の「学びに向かう力、人間性等」やメタ認知を高める指導を継続的に行ってきた。

#### 今年度の成果と課題

##### ○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

##### (1)「総合的な探究（学習）の時間」を軸としたカリキュラム・マネジメントに関する研究

①成果：コンピテンシーベースの「学びのグランドデザイン」の作成により、「総合的な探究の時間」を軸とした全ての教育活動を可視化させ、構造化を図ることができたこと。

②課題：「学びのグランドデザイン」を策定する過程で、学校全体で育成する資質・能力について更なる見直しを図る必要性が生じたこと。また、それに伴い、学校全体で育成する資質・能力のルーブリックの達成度の指標についての再度の検討、見直しを加える必要性が生じたこと。

##### (2)「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発

①成果：「総合的な探究の時間」の全面的なカリキュラム開発を通じて、従来行ってきた、探究等の型を教え込み、その達成に向けて学習活動を進めるというスタンスから、学習目標の達成に向けて生徒一人一人が、主体的に根拠（エビデンス）をもってあらゆる場面で学習活動にあたるスタンスへ、またその学習活動について振り返りを重視し次の学習活動へ進むというスタンスへと変化しつつあり、「探究的な学び」を進める雰囲気が醸成されつつある。

②課題：「探究的な学び」においては、学習活動の導入や展開のあらゆる場面で、生徒の“本気度”を高めるような工夫、仕掛けが必要である。その在り方として、目的と手段が逆転化しないような工夫が求められる。また、生徒が、学びに向かう力やモチベーションを保ち続け、主体的に質の高い探究活動に取り組ませ続けられる

よう、教員の生徒に対するファシリテート力を高めるための指導の在り方を模索する必要がある。

○資質・能力の評価について

(1) 「生徒の学びに向かう力、人間性等」を促進する評価の在り方の工夫・改善についての研究

①成果：資質・能力の文章による自己評価の記述内容を通じて、教員と生徒との対話によるフィードバックにより生徒のメタ認知を高めるといった雰囲気が醸成されつつある。また数値評価においては、第1学年の2学期末に行った生徒の自己評価の平均値、肯定的評価の割合の数値のいずれもこれまでの数値と比べて低下している。これは、見通しのもちにくい、探究的かつ協働的な学習活動を、生徒一人一人が主体的な学びを通じて、試行錯誤を繰り返しながら進めてきた結果であり、多くの生徒が、自身のそれぞれの資質・能力に関して、メタ認知能力を高めたものと分析している。生徒の“本気度”を高めるような探究活動がその背景にあるものと考えられる。

育成を目指す 資質・能力	CS (Core Skill)			CA (Core Attitude)			
	①論理的・批判的思考力	②対話力	③表現力	④積極性	⑤協働性	⑥柔軟性	⑦創造性
4月	2.7 (64.5%)	2.9 (71.1%)	2.6 (55.3%)	3.0 (73.6%)	3.0 (79.2%)	2.9 (74.6%)	2.7 (60.9%)
7月	2.8 (67.0%)	3.0 (74.9%)	2.6 (51.1%)	3.0 (74.5%)	3.1 (79.8%)	2.9 (72.2%)	2.6 (55.3%)
12月	2.7 (66.7%)	2.8 (66.7%)	2.6 (55.2%)	2.7 (57.3%)	2.7 (60.4%)	2.7 (59.4%)	2.7 (63.0%)

※平均値……4段階尺度で評価したものの平均値 ※肯定的評価の割合……「4」もしくは「3」と評価した生徒の割合

②課題：生徒のメタ認知の高まり及び生徒の自己肯定感を高めることができるような適切な評価活動の在り方

次年度の目標及び取組内容

○総合的な探究(学習)の時間等における「探究的な学習」の充実について

●教育活動のあらゆる過程で「探究的な学び」を基底においた「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発

探究の過程に従い、その活動の質が高まるような、卒業までの学習活動を見据えた第2学年における「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発を進めること。生徒一人一人が探究活動の質を上げ、主体的に取り組めるようにしていくための、教員の生徒に対するファシリテーターとしての指導力に関する研究とその実践。

○資質・能力の評価について

●学習活動のプロセス及び成果物について適切かつ妥当性のある評価活動を進めるための研究

教育評価の機能について、再度、整理するとともに、教師が生徒の学習活動を適切に評価するとともに、生徒自身が学習のプロセスを積極的に評価することを、適切に組み合わせることにより、生徒の「学びに向かう力、人間性等」、メタ認知を高める評価方法の研究を進めること。